episode.04

和紙の文化を現代に灯す

話し手　伊作和紙を復興する会
種子田（たねだ） 幸廣（ゆきひろ） さん（昭和25年8月5日生）

聞き手　希望が丘学園 鳳凰高等学校 1年

和紙の歴史が息づく

私は種子田幸廣と言います。大学で楮（こうぞ）のセルロースの研究をしていました。楮（こうぞ）っていうのは和紙の原料となる木のことです。この伊作地区では江戸時代から和紙漉きが行われていて、その時の楮は今でも残ってるんです。

この伊作地区では 1660 年ぐらいから 600 戸という大きい規模で和紙漉きが行われていたという歴史が残ってるんです。この地域は薩摩湖があって、和紙を漉いたり煮たりする時に必要な水が豊富だったこと、600 戸で和紙漉きをした地域力、薩摩半島の真ん中に位置していて鹿児島市内に近かったっていう立地の良さ、そういう要素があってこの地域で和紙作りが盛んになったんだと思います。

和紙のアップデート

正直いうと、今は記録する時にはスマホやパソコンで済ますから、和紙は必要性が低くなっていますよね。私が和紙作りを始めた時も、ただの和紙をまた作ってもつまらないっていう思いがあって。「紙」という枠を超えて、どういうふうに和紙を活用できるか考えています。例えば、近代建築とコラボレーションしたり、アートの世界に打って出たり。今は、パーテーションやランプを作って旅館とかに置いてもらったりしています。この 5 年間は弟子を育てることに集中してきて、今は海外で活躍してますよ。和紙の文化はいいものだと再認識しています。これからは、この文化を後世に残していくプログラムを作ることに力を入れようと思っています。

「今」を思い切り生きる

今、私は和紙だけじゃなくて鹿児島弁の普及活動もしているんです。鹿児島に帰ってきた時にみんな「鹿児島弁は心の原点だぁ」とかいうけど、鹿児島弁が廃れようとしているこの現状に対して、誰も手立てを考えないんですよね。それは和紙も一緒。誰も動かないのであれば、じゃあ私がなんとかしようか！ってね。私はいつも「今どう動くか」ってことを考えてます。とにかくやってみる。楽しいことを探して動く。人生は一度きりなのだから、いろんなことに挑戦したいと思っています。

聞き書きコラム

写真：楮蔵跡

伊作和紙の過去と現在

鹿児島県伊作（日置市吹上町）では、16 世紀頃から島津忠良公が下級武士の生計を助けるために紙漉きを奨励したと言われている。明治時代には製紙業に携わる業者が伊作だけで 600 件ほどあり「伊作紙」として親しまれていた。

しかし、次第に和紙の需要が減っていき、伊作の製紙業は衰退していった。そのなかで、2006 年に「伊作和紙を復興する会」が発足し、伊作和紙の復活に向けた展示や体験講座など、さまざまな活動が行われている。